
君を追いかけて

蒼葉 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を追いかけて

【Zコード】

Z5489A

【作者名】

蒼葉 樹

【あらすじ】

仲の良かつた幼なじみが弁護士になるため、留学してしまつ。そのことを、彼の部屋で見つけた一通の手紙で知る事になる。

君が、遠く離れて行きそつなのは、気付いてた。
夢を叶える為、だよね。

僕はその夢を叶える手伝いは、出来ないのかな。
君と、これから先もずっと、離れたくないんだ。

今までいつも、一緒にいたんだ。
僕と君は、幼なじみだからね。

君がいなくなるなんて、こんなに淋しいことは無いだらう。

僕は多分しつこいから、ずっと君を追いかける。
君なら、分かるよね。僕のことない。

* * * * *

君の夢、聞かせてくれたことは無かった。
だけど、僕は見つてしまつたんだ。君宛に送られて来た、一通の
手紙を。

君の家に、いつもの様に遊びに行つていた時。

プルルルルル……

洸輝の電話が鳴る。

「「めん、ひょっと待つてて
「ああ」

洸輝は部屋を出て行った。

扉が閉まる。その反動で、ベッドの脇から何かが落ちた。

細長い、一通の手紙。

送り主は僕の先輩からだった。

その先輩は、僕の中学時代の同じサッカー部の先輩。
今は弁護士をしている。

いつの間に洸輝と知り合ったのか。

落ちた拍子に、その手紙は読んでくれとばかりに二つ折りが開かれ
ていた。

洸輝はまだ戻っては来ない。電話の相手が知り合いだったのだろう
か。

それを良い事に僕は手紙を拾い上げ、読んだ。

手紙には、僕には一言も書いたことの無い、彼の夢について書いて
あつた。

洸輝は弁護士になりたいのだという。その為に昔から勉強に励んで
いたのか。

彼は勉強熱心だった。何の為かは僕に話してくれたことはない。
この先もきっと、言わないだろう。それが、洸輝だから。

手紙によると、洸輝は弁護士の資格を取る為、留学したいのだと言

う。

留学なんていつたら、もう僕とは会えなくなる、といつ事になる。
こんな大事な事、本人の口から聞きたかった。

それでも僕は彼のこと、認めてしまうのだろう。

僕は昔から洸輝に甘いから。自分の性格に呆れる。

それから何週間か経つた或る日。

洸輝の家で、もう一通の手紙を見つけた。

送り主は又もやあの先輩。

手紙はしまい忘れたのか、机の上に開いて置かれたままになっていた。

洸輝がいない間にそれを読む。

留学することが決まつたらしい。あと一年でいなくなる。

僕は将来、彼の助手でも何でもしてやると決めた。

もちろんこの事は洸輝には秘密だけれど。

洸輝が留学の事を何も言わないまま、もう一年が過ぎようとしていた。

洸輝はこのまま黙つて行つてしまふのだろうか。

そんなのは許せない。行く前に聞いてやる。

僕は彼に電話をかける。

「もしもし、俺だけど、今良いか?」

「え…今?今は、ちょっと…」

やつぱりもう留学の準備をしていたか。

「何か用でも有るの?」

逆に聞き返された。用?もちろん、有るさ。

「聞きたい事が有つて。今から行つても良いか?」「あ、ごめん。家は無理…。じゃ、外で会おう」

「分かった。そこの公園で」

「うん、今から行くよ」

彼は少しためらいながら、そう答えた。

公園に一人の男が顔を出す。

ベンチに座る僕は手を挙げて居場所を告げる。
洸輝を僕の横へ座る様、促す。

「時間が無いから、聞きたい事だけ聞くよ

「うん、何?」

「洸輝、お前、留学するんだろ?」

「え…何言って…」

「悪いけど、知ってるんだ。部屋で手紙見ちゃって」「そうだつたんだ…」

俯いて黙り込む洸輝。

「先輩と知り合いだつたんだな」「まあね」

「洸輝、弁護士になりたいんだろ」

「うん。ごめんね。ずっと言つてなくつて」

「本当だよ。隠さなくとも良かつたのに」

「そうだよね、といつて洸輝は淋しそうに笑う。

本当に一人で大丈夫か、心配になる。男なのに、か弱い奴だから。

「留学つて一年だけなんだろ。ちゃんと勉強して帰つて来いよ

「許してくれるの？」

「許すも何も、お前は自分で決めたら絶対、だろ」

「うん。絶対やめない」

僕は洸輝を安心させる為か、自然と笑顔になった。

洸輝も笑みを浮かべる。

「頑張つて来いよ」

「うん」

二週間もすると、洸輝は大空へと飛び立つていった。

次に会うのは、一年後、だな。

大丈夫。あいつには先輩も付いてる。

元気で帰つて来る。僕はそれを待ち続ける。

* * * * *

「10時30分着。間もなく参ります」

僕のいる空港で、アナウンスが告げられる。
もつすぐあいつが帰つて来る。

僕の元に一人の男が駆け寄つてくる。
そいつは僕に向かつて大きく手を振つて来た。
僕も大きく振り返す。

「ただいま！」
「おかえり！待つてたよ、洸輝」
「うん。ありがと」

一ヶ月後。

プルルルルルル……

一本の電話が入る。

「お電話有難うございます。神谷弁護士事務所です」
「あの、依頼をしたくお電話差し上げました」

電話は、事件の依頼。

「では、後日いらっしゃへお越し下さい」

ここは、光輝と僕の、弁護士事務所。

END

(後書き)

何となく書いてたらこんなのが出来ちゃいました(; ;) <
友情物は初めてだったんで良く出来てるかは不安なのですが…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489a/>

君を追いかけて

2011年1月30日02時47分発行